

2022年5月1日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書6章30～44節

説教題：「主がおられるなら」

作家の三浦綾子さんの若い時の講演を録音したCDが出て来て、聞き直しています。彼女が病気で療養している時、前川正という方が現れて、信仰の話をされたのでしょう。三浦さんは「私はクリスチャンなんか大嫌い、死んだってクリスチャンなんかにはならないんだから」と言っておられたのです。しかしその彼女が、前川さんをはじめとしたクリスチャン達を通して、また神の取り扱いを受けて、キリスト教に心を開き、信仰を持つのです。「死んだってクリスチャンなんかにはならないんだから」と言っていた人が、やがて生涯をかけて神の愛を証しする本を書く人になられた、本当に神は不思議なことを、素晴らしいことを為さると思えます。

さて、三浦さんが聖書を真剣に読み始めた時、「聖書に書いてある色々な奇跡は求道の障害にはならなかった」と言われます。そんなことはどうでも良かったそうです。問題は「イエスが神の子かどうか、そこだけだった。神の子だったら、当然、奇跡も起こすだろう」、そのような求道をされたようです。そして「ルカ福音書」のイエスのことばを通して「イエスは神の子である、神である」という確信にたどり着いた時、「本当に嬉しかった」と言っておられました。

今日の箇所は、奇跡を記す箇所です。しかし「マルコ」がこの箇所で言いたいことは「イエスは神の子であり、神であった」ということです。そのことを、弟子達はなかなか悟ることが出来なかったけれど、読者には悟って欲しい、そのような思いを持って書いているようです。今日も「内容」と「適用」とに分けてお話しします。

その前に1つ確認します。44節に「男が五千人であった」(44)とあります。当時の男尊女卑の文化では「成人男性だけ」を数えました。しかしここには女性や子供もいたでしょうから、実数はもっと多かったと思います。私は男尊女卑には大反対ですが、便宜上「5000人」と申し上げます。予めご了承下さい。(因みに、その男尊女卑の文化の中で、イエス様は女性の地位を驚くほど引き上げられた方であったことを申し添えておきます)。

1. 内容～5000人の給食の奇跡

この箇所は「5000人の給食」として知られている箇所ですが、私には何ともピンと来ない記事でした。「5000人がパンを食べた。それが私と何の関係がある」、それが大きな理由です。それと43節に「パン切れを12のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた」(43)とありますが、「籠」というと小学生の時に庭掃除で使った「背中に背負う竹の籠」を想像してしまい、「この籠はどこから出て来たのか」という疑問がありました。(「籠」については後で分かりました。ユダヤ人は旅をする時に「携帯用の籠」を持っていたそうです。「12の籠」が登場するのは、12人の弟子が1つずつ持っていたからでしょう)。さらに、もう1つの問題は、「どんな風にパンや魚が増えたのか」ということです。「本当にそんなことがあったのだろうか」と思ってしまいます。そういうこともあってでしょう、この箇所をもっと現実的に解釈しようとする人達があります。「これは『群集が自分達の隠し持っていた貧しい食料を差し出して、皆で分け合ったら、全員が食べて余るほどになった』という話だ、そう言うのです。

しかし、そんな話ではないらしいです。というのは、この記事は、4つの「福音書」が唯一そろって書いている奇跡の記事です。もしこれが「皆で分け合ったら余るほどになった」という出来事なら、「四福音書」がそろって「これはどうしても人々に伝えなければならない」として記録するようなことではなかったと思います。その意味でも、この出来事は、弟子達にとって「決して忘れることの出来ない出来事」として実際に起きたのだと思います。彼らはそれを経験した。それは彼らに強い印象を残したのです。「マルコ福音書」は、更に8章にも「4000人の給食」の記事を書きます。似たような記事を書くのです。それも現実起こったからでしょう。

私達は、自分の信仰がぐらつく時、どこに帰るのでしょうか。それは「確かにあの時、神に触れら

れた、神を経験した」と思える出来事、そこに帰って信仰の確認をするのではないのでしょうか。初代教会の人々には、「イエスを信じる」ということだけで様々な戦いがありました。そのような中で人々には、「こんなことならキリスト教を信じるのではなかった」、あるいは「ナザレのイエスを『救い主』と信じて本当に良いのか」、そういう不安や恐れがあったかも知れません。その時、何が彼らを支えたのか。それは「イエスはあの時、確かにあの驚くような御業をなさったではないか。イエス様を信じて良いのだ、いや信じなければならぬのだ」と確認することで、彼らは支えられて行ったのです。この出来事は、戦いの中にいる人々に、イエスの驚くような業を伝え、励ましを与える大事な出来事になったのです。それだけではなく、初代教会の人々は、この出来事から大事なレッスンを受け取り、この出来事を大切に語り伝えたのだと思います。

弟子達は、伝道から帰って来ました。彼らは疲れていました。だからこそイエス様は彼らに「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい」(31)と言われました。そして彼らは舟に乗り込みました。ところが、岸から舟の行方を見ていた群集には—(ガリラヤ湖は臼状に岸辺が高くなっているので)—舟がどこに向かっているのかが分かりました。そこで人々は、湖の岸辺を回ってイエス様の後を追いかけて行くのです。一行が舟で対岸—(エル・バティヤと呼ばれる地)—に着いてみたら、群集が待ち構えていました。弟子達は「いい加減にしてくれ、頼むから休ませてくれ」という感じだったかも知れません。「36節」の「…みんなを解散させてください。そして…何か食べる物をめいめいで買うようにさせてください」(36)の言葉には、弟子達のトゲトゲした雰囲気を感じられる気がします。ところが、それに対してイエス様は「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」(37)と言われます。弟子達は言い返します。「私たちが…二百デナリ—(100万円くらい)—ものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか」(37)。彼らの戸惑いが現れています。イエスは言われます。「パンはどれぐらいありますか」(38)。「五つです。それと魚が二匹です」(38)。イエスはそれを聞いて、弟子達に人々を組にして座らせるように言われました。それからパンと魚を祝福して、それを分けられました。それを弟子達が配りました。不思議なことに5つのパンと2匹の魚は増やされて、増やされて、5000人が十分に食べて満腹したのです。イエスは「残ったパンを集めるよう」に言われました。パン屑を集めると12の籠に一杯になったのです。

2. 適用

この個所から信仰生活への適用として、2つのレッスンを教えられます。

1) 信仰生活に神の助けを期待する

この出来事で注目すべきことは、この奇跡は弟子達を通して行なわれているということです。確かに5つのパンと2匹の魚を超自然的な方法で増したのはイエス様(神様)です。しかしここに集まっている人々は、弟子の手からパンを受け取ったのです。つまり彼らにしてみれば、弟子がパンと魚を食べさせてくれたこととなります。しかしイエスが「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」(37)と言われた時の弟子達の反応は「パンが5つと、塩漬けの魚が2匹だけですよ。私達にはそんなことは出来ません」ということでしょう。イエスは、彼らがそう答えることを知っておられ、敢えてこう尋ねられたと思います。どうということかということ、彼らは「自分達がこの人々に食べさせるのか」と考えた時、とても出来ないと思ったのです。(実際出来ないように見えました)。しかし、だから彼らは「イエスが共におられるなら、自分達は何をすることが出来るのか」、それを知らなければならなかったのです。何を教えられるのでしょうか。弟子達は「私には出来ません」と言いました。しかし、そこにイエスがおられた時、「出来ません」と言ったことが、彼らには出来たのです。これが私達へのレッスンだと思うのです。

今、私達にもそれぞれ、自分1人でやって行くとしたら、あるいは人間的な力だけでやって行くとしたら、「とても出来ません、とても通って行けません」と思うことがあると思うのです。しかし、そこで私達は「イエスがここに立っておられる、神がおられる」ということを計算に入れなければならないと思うのです。宗教改革者カルバンは言いました。「イエスが一時的な感情でイエスの所に集

まった人々の世話をされたのであれば、ましてイエスに従って行こうとする私達の世話をして下さらないはずがない」。私達も、神に仕える者として、神の恵みと力に与る特権を与えられているのです。それを信じなければならぬし、本当に信じたいのです。そして私達が「神の助けがある」と本気で信じて行く時に、私達には希望が与えられ、生きる姿勢も変えられて行くのではないのでしょうか。

私は、この教会にも来て下さった福島佐藤彰先生のお話を思い出します。佐藤先生は、原発事故で住む所を追われて、教会の人と一緒にあちこち避難しながら移動したのです。1年が過ぎた頃、いわき市に落ち着くことにされました。お年寄りから小さい子供まで一緒のグループです。まず、皆が住めるアパートを探された。ところが、震災で大勢の人が避難して来ていて、空いている部屋がなかった。アパートを建てる土地もない。多くの不動産屋を回りましたが、どこでも「ない」と言われ、がっかりして、とにかく名刺を置いて東京に帰られました。がっかりしているところに不動産屋さんからファックスが入ったそうです。「アパートが出て来た」。急いでいわきに行ったら、教会建設予定地の10分以内のところにアパートがあった、土地があったのです。佐藤先生が不動産屋さん「アパートはあったんじゃないですか」と言ったら、不動産屋さんが「あなたが来る前は本当になかったんですよ。あなたが来た次の1~2週間だけ、すごく増えたんです。その後またピタッと止まっています」と答えたそうです。佐藤先生は言うておられます。「分かりました。神様は涙を流す私達と一緒におられるんですね…神様はいざとなったら奇跡を起こされるんですね」。神が必要だと思われたら、私達にも奇跡は起きるのではないのでしょうか。私達も、その希望に生きて行けるのです。

奇跡というような大きなことでなくても、こんな話もあります。この話は前にもご紹介しましたが、文芸作品を執筆していたけれど、「置かれた状況からみて、どうしてもその仕事が出来そうにない」と言って編集者に断りを入れた方がおられました。そうしたら、編集者が彼女の家を訪ねて来て、話を聞いて言われたのです。「お委ねしたらいいのです」。彼女が「委ねる」ということを本気で受け止めた時、彼女に希望が与えられるのです。そして「出来ない」と思っていたことが出来たのです。

私には、非常に励まされる御言葉があります。「あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、『恐れるな。わたしがあなたを助ける』と言っているのだから。恐れるな。虫けらのヤコブ…わたしはあなたを助ける」(イザヤ41:13~14)。「虫けらのヤコブ」というのは「信仰の弱い者」という意味です。その信仰の弱い者を、神は「助ける」と言われるのです。神は私達を憐れんで助けて下さるのです。大事なことは、「神の助け」を信じて、目の前に置かれた所を歩き続けることだと思ふのです。その時に、私達は前に向かって進んで行けるのではないのでしょうか。

2) 主の憐れみに生きる

イエス様は、なぜ弟子達に「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」(37)と言われたのでしょうか。この場面においてイエス様と弟子達の決定的な違いは、「イエスを追いかけて集まって来ている群衆に対する憐れみ」ではないのでしょうか。イエス様は、導きを求めて—(奇跡を求めていたかも知れませんが)—後を追って来た群衆を見て「羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた」(34)のです。何より人々を憐れまれたのです。「キリスト教は憐れみです」と言われた方の言葉を思い出します。イエス様は、弟子達が疲れていることをご存知でした。それでも弟子達に「イエス様と共に生きる者としての憐れみ」を持って欲しかった、憐れみに生きて欲しかったのではないのでしょうか。だから、ご自身の業に弟子達を引き入れられたのです。弟子達は、その時の驚き、祝福の状況、そしてその祝福に自分達が関わることが出来たことへの深い感慨、その恵みの経験を忘れなかったのです。

その意味でこの箇所は、私達にも「主の憐れみに生きるように」という勧めをするのではないのでしょうか。もちろん、私達は日々の生活で精一杯、自分のことで精一杯、それが正直なところではないのでしょうか。(私はそうです)。自分のことで心が占められています。イエス様は、私達のその状況をご存知です。だから弟子達に「私がいつも休んでいる所に一緒に行って休みなさい」と言われました。私達にとってそれは「礼拝」と置き換えても良いと思います。だからイエス様は、礼拝を通して私達

に信仰生活を続けて行く力(糧)を下さいます。しかし、もし私達がずっと自分のことだけを考えるだけで信仰生活を終わってしまうなら、それは、私達もこの時の弟子達と同じように「イエス様の人々を憐れむ憐れみ」に対して麻痺しているということにならないでしょうか。イエス様は弟子達に「あなたがたで…食べる物を上げなさい」と言われました。そして彼らがイエス様に協力し始めた時、彼らが差し出した僅かのものを用いて素晴らしいことを為さったのです。その意味で私達も「人の魂の救い—(魂の痛みからの救い)—に対する重荷、神様が『ご自分の子である人間』を見ておられる憐れみ」、そのようなことに対して、柔らかい感覚を取り戻すことが出来れば、と願います。それは私達の祝福でもあるのです。

三浦綾子さんの講演の中に次のような話が出て来ます。彼女が無気力な状態で入院をした時、1人のお医者さんが言うのです。「あなたは自分ばかりを見ている。自分ばかりを見るのを止めて、他の人を見なさい。あなたの隣りの人は、あなたにコップ一杯の水を汲んで来て欲しいと願っているかも知れないではありませんか」。その言葉を聞いて、三浦さんの生きる姿勢は変えられるのです。「『他の人を祝福しようとする時、自分が祝福される』、その平凡な事実をやっと気づいた」と言っておられました。

その時、「マルコ福音書」だけが強調していることがあります。それは、イエス様が何より人々を教えられたということです。「彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた」(34)。御言葉を語られたのです。私達も、御言葉なら、豊かに与えられているのではないのでしょうか。その意味で、私達に期待されている1つのことは、御言葉を分かち合うことではないのでしょうか。三浦さんは「虚無的な療養生活をしていた時、自分を生かすヒントになるような言葉を求めていた」と言っています。イエス様は言われました。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉による』と書いてある」(マタイ 4:4)。私が牧師になった後、久しぶりに友人の家を訪ねたことがあります。そうしたら、友人の家族の人が、私が牧師だということを聞いてこう言われました。「『神は乗り越えることの出来ない試練は与えない』と聖書にあると聞いています。私は、その言葉に支えられています」。クリスチャンの方ではありません。しかし御言葉は、人を生かすのです。私達に出来ること、分かち合うことが出来るもの、その1つは御言葉ではないのでしょうか。それは私達も、豊かに持っています。それがその人を支えるだけでなく、その人の人生も変えるかも知れません。三浦さんも「『父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです』(ルカ 23:34)、この言葉で神に出会った」と言っておられました。身近な人間関係の中で、出来る範囲で、隣人の痛みを、必要に、憐れみの心を持って寄り添いたい、そのような心を持ちたい、そして神から与えられている恵みの御言葉を分かち合っていく者となれば、と願うことです。